

現行のロールシャッハ・テストへの 方法論的懐疑（その1）

田 澤 安 弘

現行のロールシャッハ・テストへの方法論的懐疑（その1）

田澤安弘

もくじ

- I. はじめに
- II. 解釈に理論は無用か
- III. 感覚与件論を超えて
- IV. 解釈はいつ始まるのか
- V. 法則定立的方法と個性記述的方法
- VI. 情報収集モデルと治療モデル
- VII. まとめと方向性
- 注釈
- 文献

I. はじめに

（本論は、「現行のロールシャッハ・テストへの方法論的懐疑」の前半部分のみ収録したものである。）

最初に、本論における私の方法論的な立場について述べておく。私が基本的に依拠するのは、野家（1993）の『科学の解釈学（Hermeneutics of Sciences）』という考え方である。科学の解釈学とは、「科学の二元論」や「科学の論理学」とは異なる、第三の方法論的な立場のことである。科学の論理学とは、人間科学を自然科学に還元して方法論的な一元化を目論む立場で、科学理論は一定の公理と演繹規則とからなる形式的体系であるという「公理主義」、科学理論は理論から独立した観察事実によって検証され取捨選択を経なければならないという「検証主義」、科学理論は唯一の客観的真理に向かって前進していくという「進歩主義」という特徴を持つ、論理実証主義的な科学哲学の潮流のことである。

「科学の二元論」とは、精神科学と自然科学を断絶し、自然科学の量的かつ法則定立的な方法論に対して、Dilthey, W.C.L. (1900) が精神科学の方法論として提起した解釈学に端を発するものである。そして、野家の科学の解釈学とは、自然科学と人間科学を峻別したり、一方を他方に還元したりするのではなく、両者をより広いパースペクティブの中に位置づけしなおす立場のことである。

では、ロールシャッハ・テストの方法論に関わる歴史を、以下に要約して述べる。ロールシャッハ・テストの紆余曲折は、Ellenberger, H.F. (1954), Exner, J.E. (1986), 村上・村上 (1988), Wood, J.M. et al. (2003) などに詳しいが、以下はそれらを参照したものである。

Herman Rorschach は、インクプロットに対する反応の違いによって精神疾患を診断することができる可能性を見出し、その知見を1921年に『精神診断学』として公刊した。彼の研究は、Syzmond Hens が1917年に公刊した『学童、正常成人および精神病者に対して無定形のインクのしみをういた空想テスト』に影響を受けたものだが、それとは反応解釈の着眼点が大いに異なっていることが特徴である。

Hens は、インクプロットに対するクライエントの空想を重視していた。つまり、反応の内容的側面を分類することが重要だったのである。それに対して Rorschach は、インクプロット・テストを空想力のテストとは考えずに、どのようにインクプロットの形態を

解釈するののかという知覚のテストであると考
えていた。つまり、色彩や形態や運動などの
知覚の仕方が、クライアントの現実に対する
基本的態度を反映していると考え、反応の形
式的側面を重視したのである。

また Rorschach は、反応の分析を客観的
に遂行するために、インクプロットのどこに
(反応領域)、何を(反応内容)、どのように
して(決定因)見たのか、それらに関わる独
特のコードを開発している。そして、それら
の個数や百分率といったいわば統計的手法に
よって反応の意味を理解すると同時に、プロ
トコルを質的に解釈することも行っていた。
心理テストに、数値の基準を定めたり信頼性
や妥当性を検証したりする統計学の基礎理論
が応用されるのは1930年代から1940年代にな
ってからであるので、彼の統計的手法といっ
てもそれは極めてシンプルなものであったこ
とに疑いはない。けれども、後に言及する量
的分析と質的解釈という方法論上の二項対立
図式は、すでに Rorschach 自身が抱えていた
のである。

Rorschach の死後、ロールシャッハ・テ
ストは米国に移入されることになった(注釈1)。
その代表的な人物は、Samuel Beck(1937,
1944, 1945, 1952) と、Bruno Klopfer(1942,
1954, 1956, 1962, 1970) である。彼らのあい
だには、ロールシャッハ・テストの方法論を
めぐる論争が1930年代に繰り広げられたの
であるが、それはいわば主観的解釈と客観的
解釈との対立とでも呼ぶべきものであった。
Beck の主張は、ロールシャッハ・テストは
標準化されるべきであって、主観的で行き
すぎた質的解釈は戒めねばならないという
ものであった。反対に Klopfer の主張は、
数量化を行って解釈の主観的要素を取り除
くのは不毛であるというものであった。結
果として両者の議論はかみ合わないまま決
裂するのだが、背景的な思想として Beck
は論理実証主義を、Klopfer は現象学を
それぞれ重視しており、

互いの方法論的な違いが明白となっただけ
の不毛な議論に終わったようである。

1940年代から1950年代にかけてロール
シャッハ・テストはさらに発展していき、
さまざまな流派が台頭することになった。
この時代に出版された影響力のある代
表的な著書は、Klopfer and Kelly (1942)
の『ロールシャッハ法』、Beck (1944,
1945, 1952) の『ロールシャッハのテ
スト I, II, III』、Rapaport, D.,
et al. (1945, 1946) の『診断的心理
検査法 I, II』、Schafer, R. (1954)
の『ロールシャッハ法の精神分析的
解釈』、Piotrowski, Z. A. (1957)
の『パーセプト分析』などである。
全体として、精神分析学の理論が反
応解釈に取り込まれた時代であるが、
Rorschach 本人が懐疑的であった、
反応内容の精神分析的象徴解釈を推
進する著書も多数現われている。た
とえば、Bochner, R., and Halpern,
F. (1942) の『ロールシャッハ・テ
ストの臨床的適用』、Lindner, R.
(1950) の『ロールシャッハ・プロ
トコルの内容分析』、Phillips,
L., and Smith, J. G. (1953) の『
ロールシャッハ解釈：高度な技法』
などである。

しかしながら、このまま躍進するはず
であったロールシャッハ・テストはさ
まざまな批判にさらされ、1960年代
にはその存在価値すら危ぶまれる危
機的な段階に到達することになる。
代表的な批判は、Cronbach, L. J.
(1948, 1949, 1950, 1955) の一
連の論文であろう。彼は行きすぎた
象徴解釈や、Klopfer の主観的な解
釈法を批判しているだけではない。
Klopfer を批判して客観的な解釈を
重視していたはずの、Beck のロー
ルシャッハ・システムをも批判して
いるのである。この批判は論理実証
主義的な科学的研究の立場からの
ものであるが、その内容は、ロー
ルシャッハ・テストは心理測定法と
して求められる信頼性や妥当性を満
たしておらず、これまでに発表され
た統計的研究の結果の大部分は不適
切で、根拠が疑わしいというもので
あった。

その後も、科学的な立場からのロールシャッハ批判が相次いだ。心理測定法としてのロールシャッハ・テストの存在価値は、まさに風前の灯となった。そして、1960年代末から1970年代半ばにかけて、科学的根拠のない従来のロールシャッハ・テストを放棄するか、それを改変した上で使用する試みがロールシャッハ研究者の内部から現われることになる。たとえば、Zubin, J., Eron, L.D., and Schumer, F. (1965) は、妥当性に乏しいロールシャッハ・テストを、テストというよりもむしろ面接技法として実施することを推奨している。また、Goldfried, M.R., Stricker, G., and Weiner, I.B. (1971) は、テストとしての基準を満たしていないロールシャッハ指標を、臨床目的に使用しないほうがよいと述べている。そして、Aronow, E., and Reznikoff, M. (1976) は、インクプロット・テストを心理測定法として使用するのであれば、ロールシャッハ・テストを放棄して、ホルツマン・インクプロット法 (Holtzman, W.H., 1961) に乗り換えるべきであると述べている。

ところが1970年代になると、ロールシャッハ・テストは劇的な復活を遂げることになる。Exner, J.E. (1974) の『ロールシャッハ：包括システム』が出版されたのである。この包括システムは、さまざまなロールシャッハ・システムから実証的に擁護可能な指標などを集約して作られた、新たなロールシャッハ・システムである。包括システムのおかげで、それまで衰退する一方であったロールシャッハ・テストは起死回生し、1990年代まで発展を遂げるようになった。世界的に見ると、ロールシャッハ・テストはExnerの包括システムに統一され、他のロールシャッハ・システムは忘れ去られてしまったかのようである。

しかし、歴史は繰り返すものである。Wood, J.M., et al (2003) に要約されているが、1990年代半ばから、またしても包括シス

テムの数々の指標に対して疑問が投げかけられたのである。かつてのロールシャッハ・テストの弱点（信頼性の問題、低い妥当性、適切な基準の欠如、過剰病理化の傾向）は、包括システムにおいても改善されたわけではなかったのである。もちろん包括システムの側からも反論がなされている。Woodらはロールシャッハ・テストの終焉を謳っている。そして、ロールシャッハ・テストは、いまでも臨床で使用され続けている。

以上、ロールシャッハ・テストの歴史について簡単に振り返った。方法論的には、論理実証主義の立場からロールシャッハ・テストそのものの存在価値に疑問を投げかける動き、それから客観的な量的分析を重視する立場と主観的な質的解釈を重視する立場との対立が、繰り返されてきたことが理解されるであろう。いずれにせよ現代のロールシャッハ・テストは、その使い手の世界では、論理実証主義の立場が一大勢力になりつつあることに疑いはない。

しかしながら、そのような一大勢力であるExnerの包括システムでさえ、ロールシャッハ反応の量的分析のみ行うのではない。実際には、プロトコルの質的解釈も併用されるのである。包括システムだけではない。過度に主観的であるとBeckに批判されたKlopferのロールシャッハ・システムも、手続きとしては量的分析と質的解釈が併用されるのである。現存するロールシャッハ・システム間にはさまざまな相違点があるだろうが、それぞれのシステムに共通すると考えられるのが、解釈上のこうした質と量の二項対立ないし併用である。

われわれには、これまで量的分析と質的解釈を無頓着に併用してきた歴史があるのだが、方法論的な意味で、そのようなことは可能なのであろうか。たとえば、Smith, B.L. (1994) は「パーソナリティ・アセスメントの経験主義的方法が、精神診断学の領域への論理実証

主義 (logical positivism) の適用—それは未来の行動を予測することである—に相当する一方で、精神分析の伝統は、解釈学 (hermeneutics)、記号と象徴の科学、それから意味の産出により根ざしている」と述べている。法則定立的な量的分析手法としての経験主義的アプローチと、個性記述的な質的解釈手法としての (たとえば) 精神分析的アプローチは、このように認識論的な意味で根本的に異なる背景を持っている。ロールシャッハ反応の意味を理解するに当たって、前者の科学的なアプローチは一語一義的な意味作用を要求するであろうが、後者の解釈学的なアプローチにおいてそれは不透明であり、あくまで多義性しか意味することができないのである。

ロールシャッハ・テストを非科学的であると批判し、方法論としての解釈学と対立するのは、一定の哲学的立場としての論理実証主義である。野家 (1993) によると、論理実証主義が展開した「統一科学運動」は方法論上の二元論を否定して、人文社会科学に対しても自然科学と同様の数学的物理学的な方法への一元化を要求した。今日、人文社会科学の自然科学化が進行し、心理学の分野で行動科学が一定の勢力を誇っているのは、その一掃結だといえるのかもしれない。それに伴って、認識論に関わる研究も哲学から科学の手に、つまり経験的心理学の手に渡り、哲学の科学化 (認識論の自然科学への包摂) が進行中である。木村 (2005) がいうように、「近年の神経科学・認知科学に定位する科学哲学は、意識的・精神的な現象のすべてを脳・神経機構の過程に還元することによって、『唯物論的』な一元論を指向している」のである。

論理実証主義による方法論的一元化を進めるとすれば、ロールシャッハ・テストはあくまで心理測定法 (psychometric test) として使用せざるを得ないであろう。つまり、量的分析しか認められないか、質的解釈を行うとしてもあくまで量的分析の枠組の中で行う

のである。また、解釈学による方法論的一元化を進めるとすれば、ロールシャッハ・テストは投射法 (projective technique) のようにしか使用することができないであろう。つまり、もっぱら反応内容の象徴解釈や、言語表現の精神分析的な防衛解釈を行って、量的分析を放棄するのである。

それに対して、科学の解釈学に依拠してロールシャッハ・テストを理解するとどうなるのであろう。これが、われわれの目指すところでもある。私が依拠する野家 (1993) の解釈学が目論むのは、「『科学的知』と『物語的知』との二項対立とヒエラルキーを無効化し、その境界線を不明瞭化するとともに、『科学的知』を多元的な『物語的知』の一形態として捉え直すこと」である。したがって、本論全体が提示しようとする統合の方向は、少なくとも量的分析を否定した質的解釈への方法論的一元化ではないし、科学の成果を否定した反科学の唱道でもない。私は、科学的知と物語的知を相対的に区別しながらも、そのあいだには明瞭な境界線を引くことができないものとして、つまり両者をひとつの連続体をなすものとして理解する。強く表現すれば、これは概念上の二項対立図式に対する破壊であり、量的分析と質的解釈の自覚的併用でもある。

本論では、主として論理実証主義の影響が濃厚なロールシャッハ・テストの姿を浮き彫りにして、そこから派生するさまざまな問題点について議論するつもりである。そして、われわれがこれから向かうべき方向性を提示し、ロールシャッハ・テストの新次元を開拓する基礎を築くつもりである。では、科学の解釈学の視点に立って、現行のロールシャッハ・テストに対する数々の方法論的懐疑を提示していこう。

II. 解釈に理論は無用か

Weiner, I. B. (1995) によれば、主として知覚の側面に焦点化する経験的アプローチは、「理論に基づかない (atheoretical)」アプローチといわれることがある。その一方で、主として連想の側面に焦点化する概念的アプローチは、精神分析的ないし精神力動的なパーソナリティ理論を根拠としてそれに根ざしている。ここで彼が知覚内容と表象内容を分離して、前者を論理実証主義的な、理論に基づかないアプローチに、後者を解釈学的な理論的アプローチに、それぞれ対応させていることは明白である。彼の立場は「理論的相違に根ざす不和を好まない」という一見中立的なもので、「ロールシャッハ・インクプロット法は理論を超越している」と結論している。この論文の副題は「理論よ、われわれの仲を引き裂くことなかれ (Let Not Theory Come Between Us)」というものである。

ここでわれわれは混乱することであろう。ロールシャッハ・テストの経験的アプローチが理論に基づかないとすれば、その立場が理論的な概念的アプローチと競合するはずはないのではあるまいか。なぜなら、一方に理論があり、他方に理論がないというのであれば、そもそも理論的相違など云々することができないからである。したがって、理論的相違は、精神分析的アプローチとその他の概念的アプローチとのあいだにあるのであって、指向する理論に応じて多様な結論に導く概念的アプローチと、一義的な結論に導くような、理論に基づかないアプローチとのあいだにはないはずである。

このような Weiner の論旨の背景には、非理論的アプローチと理論的アプローチを隔絶する「分離主義」がある。それは、彼 (Weiner, 1994) が「RIM は、パーソナリティの機能に関わる有益な情報を、特定の理論とは関係なくそれ自体で生み出す。しかし、パー

ソナリティの機能に関する妥当な理論であれば、どんなものであれロールシャッハ変数の意味を説明するために役立つ諸概念を提供することができる」と述べていることに明白である。

では、「特定の理論」なしに「それ自体で」生み出される情報とは、一体何なのであろうか。Weiner (1994) は、「ロールシャッハは、パーソナリティの機能に関わる有益な情報を生み出す。というのは、自分が知覚するものに対してしばしば個別的な特徴を付け加え、ひいては自分の欲求や態度や関心に関わる多くのことをあらわにするような、連想的状況を創出するからである」と述べ、それについて「この説明は理論的なものではない。インクプロットがどのように見えるのか、そのことを被験者が話す際に生起することを、記述しただけである」としている。

ここで問題がはっきりと見えたことであろう。Weiner にとって、理論に基づかないアプローチとは、それ自体で生み出される情報を特定の理論なしに「記述」することを意味しているのである。そして、「ロールシャッハの知覚と連想をパーソナリティ機能の正確な記述にうまく置き移すには、特定のどんな理論的方向づけにも依拠する必要はないし、それに限定されることもない」(Weiner, 1995) という陳述からは、彼がやはり理論的アプローチよりも理論に基づかないアプローチを重視していることが理解されるであろう。

上記の Weiner の理解からは、次のような解釈過程論が構成される。それは、感覚論的な旧来の学説に通じる感覚与件論であり、彼の論理実証主義者としての側面を浮き彫りにするものである。

それ自体で生み出される情報を特定の理論なしに記述することは、言い換えれば、臨床家にとってすでにそこにある既存の感覚与件の単なる模像を記述しているにすぎない、ということである。さらにいえば、臨床家は現

実のなかに直接的かつ客観的に含まれている情報を抽出し、あるいは外からもたらされるすでに出来上がった内容を受容して、所与の整序と分類を行っているだけということになる。この考え方は、論理実証主義者が信奉する、感覚与件論に他ならない。村上(1989)は、感覚与件論について、次のように要約している。すなわち「人間の認識は、まず第一段階として、感覚に万人共通の与件が与えられ、次に第二段階として、人間はそれぞれに備わった解釈体系を働かせてそれを解釈している、ということになる。この第二段階は、しばしば食い違うが、第一段階こそ、すべての知識の基礎となるべきであり、理想的に言えば、そこだけですべての判断が決まれば、知識は純粋に「客観的」になり得るのではないか」である。

このような知覚の二段階仮説は、「その内容が質料的・感性的内実からみて何で<ある>のかということ」と、「その内容が認識の関連のなかで何を<意味する>のかという問題」(Cassirer, E., 1910)を、接木のようにして接合するものである。第一段階では、どの人も同じものを受け取ることになるが、これは「ロールシャッハ・インクプロット法には、理論の相違を超越する多大な力があり、被験者のパーソナリティ特徴について、同じような像を描き出すための熟練を可能とするのである」(Weiner, 1995)という説明に対応するであろう。第二段階では、同じ感覚与件に別様の主観的解釈が与えられるために異なった結果が生じることになるが、これは「有能なロールシャッハ実践家が、理論的方向づけの相違のせいで、被験者のパーソナリティ特徴について甚だしく異なった結論を描出するように導かれてしまうのだけれども、そうしたことを未然に防ぐような、よき議論の前提などない」(Weiner, 1995)という説明に対応するであろう。

このように理解すると、「ロールシャッハ・

インクプロット法は理論を超越しているので、理論的選好にかかわらず、われわれは一つ屋根の下に例外なく住まうことができるのである」(Weiner, 1995)という一見すると平等な全体論は、理論に基づかない論理実証主義的なアプローチを頂点とし、それに従属する理論的アプローチ群から構成される、一種の全体主義へと意味を変えることになる。つまり、ロールシャッハ解釈の各種の形式が、特定の単一アプローチを頂点として垂直的にヒエラルキー化してしまうのである。

感覚与件論に話を戻そう。Weinerが述べているように、あるいは感覚与件論が前提としているように、所与はたんに記述されるだけなのであろうか。答えは否である。ここでは、Cassirer(1910)がWilliam Jamesの概念である「心理学者の誤謬(the psychologist's fallacy)」を取り上げて、「われわれがある一定の心的事実を<表わし>、それを簡単に<伝える>ようにするために使用する手段が、この事実そのものに含まれている現実の要素と受け取られるのである」と説明しているような、すり替えが起こっているのである。さらにいえば、所与はたんに記述されるのではなく、一定の概念に即応して整形される。つまり記述は、概念によって論理的に先取りされているのである。これは、論理実証主義が前提とする感覚与件論に対してHanson, N.R.(1958)が提出した、「理論負荷性(theory-ladenness)」テーゼである。臨床家は、感覚与件を通じてあるがままの世界を観察するのではないし、純粋無垢であるはずのいわゆる観察事実、すでに理論を背負って解釈されたものである。したがって、臨床家にとって見ること(記述すること)と解釈することは実は統一的なひとつの行為なのであって、二段階に分断された別々の行為ではないのである。

導き出される結論は、Weinerとは正反対になる。臨床家の観察内容(知覚内容と表象

内容) をクライアントのパーソナリティに関わる論理的な概念に形成するためには、何らかの理論が必要である。つまり臨床家は、それ自体は見えない視点として与えられるだけであるが、論理的に先取りされた理論なくしては記述することさえできない、ということである。それに伴って、理論に基づかないアプローチに依拠すれば誰にでも同じ感性的素材が入手可能で、理論的なアプローチがそれを異なった概念的形態のもとで捉える方法であるとする考えも無意味になる。というのは、理論に基づかないアプローチも実は何らかの理論に負荷されているはずであり、それさえも理論的なアプローチのひとつとして相対化した上で再把握されるからである。

ここで、論理実証主義的なアプローチと解釈学的なアプローチの分離主義は崩れ、前者を頂点とした全体主義ではなく、真の意味での全体論として、われわれは一つ屋根の下に平等に住まうことができる。もちろん、この立場を徹底すると相対主義に陥るが、それについては感覚与件を出発点とするのではなく、「われわれに与えられているのはただ<ひとつ>の現実である」(Cassirer, 1910) ということを出発点とすることによって、回避されるであろう。

次に、「いつもおのれのアプローチを理論に依拠しないものとして述べてきた」(Weiner, 1994), Exner の見解について検討を加える。極めて興味深い論争が Kleiger, J. H. (1992a; 1992b) と Exner (1992) とのあいだで繰り広げられており、われわれはそこに、ロールシャッハ・テストと理論に関する Exner の明快な考え方を読み取ることが可能である。

そこで Exner が提出した「見出されたものの合成 (composite of findings)」なる概念は、理論的なアプローチに対する「刺激的な挑戦」である (Andronikof-Sanglade, 1995)。Exner (1992) は、包括システムを

構成する「見出されたものの合成は、それがどんなものであるにせよ単一のパーソナリティ理論や精神病理学理論にぴったりと適合するものではないし、それをもろもろの理論モデルと抱き合わせるような仕方では歪曲したり、無理に押し付けたりするようなことはしたくなかったのである」としている。見出されたものの合成とは、一体何なのであろうか。おそらく、見出されたものの合成とは、直接的には構造一覧表を構成する各指標のことなのであろう。そして、見出されたものとは、各指標を構成する要素的なスコアのことなのであろう。しかし、Exner は厳密に両者を区別して使い分けているわけではないようである。

この論文の中で、Exner は「Kleiger が指摘するように、包括システムは非概念的なものであるとはいえないが、基本的には理論に依拠しないものである」と述べている。それに対して Kleiger (1992b) は「テスト解釈に対する理論的アプローチと経験的アプローチを暗に二元化して、本題からそれるようなつまらない議論を展開している」と批判している。たしかに、Exner の次のような陳述、つまり「理論によって、それより先に見出されたものを統合するための有益な方法もたらされることは分かっている。しかし、データの解釈を、見出されたものの統合と混同してはならない」であるとか、「揺るぎのない見出されたものに表現されていることを利用しようとしながら、見出されたものを概念的に説明するために、多くの理論的モデルを渉猟したのである」は、混乱を招くばかりである。

要点をおさえると、次のようになるであろう。Exner のいう“findings”が理論に先立って見出されるとされていることや、「見出されたものに表現されていること」という表現から、やはり彼も、「名辞がいやしくも有意義であるためには、感覚与件の名前か、その

ような名前の複合体か、あるいはそのような複合体の短縮形か、そのいずれかでなければならぬ」として、概念が感覚与件の「直接報告」に還元可能であるとみなす、論理実証主義的な「還元主義 (reductionism)」(Quine, W. O., 1953) に依拠していることは明白である。したがって結論は、Weiner に対するものと同じである。

包括システムの「感情の調節、情報処理の効率、非論理的推論、ストレス耐性などは、その人の行動に直接的に見出される。したがってそれらは、精神分析の場合のような(エディプス・コンプレックスのような-田澤注)観念的構成体との関連ではなく、現勢的行動との関連において測定したり規定したりすることができる」(Andronikof-Sanglade, 1995) という評価を、つまり「その人の行動に直接的に見出される」という評価を、私は与えることができない。Exner も基本的には感覚与件論の伝統のうちにあり、彼のいう「見出されたもの」には、すでにそれを越えた規定が、つまり諸要素をある統一的集合に統合するための対応づけの概念がアプリオリに置き入れられている。彼はこの「概念」によって、アポステリオリな思惟の形象ではなくアプリオリな存在の構成要素を意味しており、知覚の受動的次元、つまりボトム・アップ的な帰納的・分析的推論過程しか考慮していないようである(注釈2)。

いずれにせよ、受動的な知覚の過程は、トップ・ダウン的な演繹的・総合的推論過程としての能動的な判断の過程と分離されることはない。そこに見出されるものは、実は臨床家が能動的に見出すものなのである。加えて、実際、包括システムは情報処理「理論」あるいは認知「理論」に依拠しており、さまざまな理論の連続体を仮定すれば、それは精神分析理論と程度の差しかない。もちろん、見出されたものの合成と抱き合わされる経験的な諸概念と、精神分析理論とのあいだにもたか

だか程度の差があるにすぎないのである。

結論である。論理実証主義的アプローチは理論に依拠しない帰納的・分析的アプローチであり、解釈学的アプローチは理論的な演繹的・総合的アプローチであるという二元論は、修正する必要がある。理論を概念と呼び変えようが、原理やモデルという言葉を使おうが、いずれにせよ何らかの照合枠がないかぎり、われわれは一定の秩序の下には何も認識することができないわけであるし、さらには、何かひとつの理論に限定するように選択が強制される理由もまったくない。分析と総合、アプリオリとアポステリオリの区別は、「連続主義 (gradualism)」(野家, 1993) によって無効化されるのである。

Ⅲ. 感覚与件論を超えて

ロールシャッハ状況において、クライアントはどのようにインクプロットを認識しているのだろうか。このような問いに答えるのは反応過程論であり、これまでも実にさまざまな議論が展開されている(ACKlin, M. W. and Wu-Holt, P., 1996; Andronikof-Sanglade, A., 1995; Exner, J. E., Armbruster, G., and Mittman, B., 1978; Exner, J. E., 1996; Gold, J. M., 1987)。

ロールシャッハ状況に限定しないで、われわれはどのように世界を認識しているのだろうかという問いを立てるとしよう。するとそれは、哲学の世界では「認識論」や「存在論」と呼ばれる分野に他ならない。認識論とは人間の認識能力を検討する哲学の一分野であり、認識とは対象をひとつの統一体として捉えようとする意識の活動のことである。そして、存在論とは、存在するもの一般についての認識に関わる分野のことである。

このような哲学の認識論や存在論にはさまざまな立場があるのだが、ロールシャッハ・テストの反応過程論はどうだろうか。すで

に Exner の包括システムが感覚与件論に依拠していることについて述べたが、それは Rorschach (1921) 以来、現在に至るまで、ロールシャッハ・テストの反応過程論に脈々と受け継がれてきたことなのである。その意味で、人間運動反応Mの理解にかぎられるが、Malmgren, H. (2000) が旧態依然とした連合主義 (associationism) からの脱却と、最新の哲学および心理学の取り入れを訴えていることは、特筆すべきであろう。以下に、私の考える代表的な反応過程論の諸説を要約して提示する。

まず、原点である Rorschach 本人である。ロールシャッハ・テストの創始者である Rorschach (1921) は「無作為的絵柄の解釈(Deutungen) はむしろ知覚 (Wahrnehmung) と統覚 (Auffassung) の概念に属する」と述べ、この「形態解釈実験を知覚の検査と呼ぶことの正当性は疑いえない」と断言している。ところが、彼にとって知覚とは「現存するエングラム (記憶心像) を新しい感覚複合体に連合的に同化させること (Angleichung)」であり、統覚とは「感官知覚の複合体をそれに関連しているものと同一視すること (Identifikation)」(知覚をそのうちに包含するより広い概念) であるから、ここには感覚与件の受容+記憶、あるいは感覚与件の受容+判断なる知覚の二段階仮説が認められる。これは、いわゆる感覚与件論に他ならない。つまり、色や形といった感覚の諸要素からなる複合体 (感覚与件の集合) に記憶や判断が加わることによって、はじめて対象の知覚が成立するというわけである。

彼の感覚与件論は、師である Eugen Bleuler から受け継がれたものである。そして、Bleuler の観念連合心理学説 (統合失調症における連合の弛緩) はもともと Wilhelm Wundt の連想心理学ないし要素主義心理学を応用したものであった。その意味で、ロールシャッハ・テストの解釈仮説には、多少な

りとも Wundt の影響が及んでいるはずである。

そうした諸要素の連合なる考え方は、すでに述べた知覚にかかわる叙述に顕著に認められるし、その他には、たとえば「運動反応 (B) は、形態知覚プラス運動感覚の流入によって決定される反応である」とか、「大部分のB反応においては、同化の過程ですでに形態エングラムと運動感覚的エングラムとが稲妻の如きはやさで混ざり合うという印象、つまり、見られた対象の形と運動は同時的に把握される (一次的B) という印象が強いのに対し、別な場合には、まず絵柄の形が、つづいてその運動が知覚されるように見える (二次的B)」といった運動反応にかかわる表現や、あるいは「まず第一に形を、次に色彩をも考慮に入れる形態色彩反応においては、必然的に、心的機能の異なった領域—形の解釈においてはとくに連合的要因、色彩を考慮するときには情動的要因—が合一せねばならない」という色彩反応にかかわる表現に反映されているように思われる。

もうひとつ、Rorschach の反応過程論に見て取れる特徴は、「知覚-解釈連続体仮説」とでも呼ぶべきものである。彼は次のように述べている。すなわち「無作為の形の解釈は、感覚複合体とエングラムを同化しようとする努力 (Angleichungsarbeit) が大きくて、それが心内でそういうものとして捉えられるようになる、ひとつの知覚であるということが出来る。このように感覚複合体とエングラムの間の不完全な相同性 (unvollkommenen Gleichheit) を心内で知覚することが、解釈という性格を知覚に附与するのである (鈴木訳を一部修正した)」である。

難解である。彼によれば、解釈と知覚の違いは「連合的要因にある」のだけれども、「知覚」とは「同化の仕事 (Angleichungsarbeit) が意識されることのない同化」であり、解釈とは「同化の努力 (Angleichungsarbeit)

の意識化を伴う知覚」である。つまり、現存するエングラムを新しい感覚複合体に連合的に同化させる際に、それが難なく進行すれば知覚であり、不一致が意識されれば解釈になるというわけである。

さらに、解釈と対比して知覚の例証としてあげられているのは“bestimmen”と“erkennen”という言葉である。前者は「一本の木を知覚する場合」や「知り合いの顔を再認する場合」のように「本来の知覚 (eigentlichen Wahrnehmung)」が問題になっていることを示唆するもので、絵柄を「決めつける」、あるいは「他のものではないこのものとして名づける」といった意味であろう。このような人たちは「ほかの被験者が絵柄の中に何かほかのものを見たら、驚くことさえある」のだという。後者は「知能の欠陥をもった者」が絵柄を解釈するのではなく、絵柄を「具体的に知覚する」、あるいはそれらが「絵 (Bilder)」だっていうことは「分かっている」のだと言い張る、といった意味であろう。

このように、彼は解釈と知覚を区別しているのだが、その違いについて次のように要約している。すなわち「知覚と解釈の違いといっても、それは単に個人的かつ連続的な性質のものでしかなく、一般的かつ原理的な性質のものではない。それゆえ、解釈は知覚の一特殊例にすぎないのかもしれない (鈴木訳を一部修正した)」である。彼は解釈を知覚のうちに包含して、一般的かつ原理的なレベルでは両者を連続的に捉えているが、一個人の個別的な知覚においては、いわば「解釈としての知覚」と「本来の知覚」を区別しているように思われる。理論的にいって解釈と知覚が連続体上にあるかぎり、双方には程度の違いしかないはずである。しかし、なんとも歯切れの悪いこの一文から、彼が両者の違いを見て取って区別していたことが理解されるのである。

次に、上記のような感覚与件論とは一線を

画するような、ロールシャッハ史上に彗星のごとく現われた斬新な反応過程論を紹介する。

Gibson, J.J. (1956) は、「インクプロットに対する反応は知覚作用の現われであるといわれるのだが、この語法はその言葉の常識的な意味あいと矛盾するものである。心理生理学的な、現実的な視点からいうと、ロールシャッハへの反応は知覚とは何の関係もない」として、ロールシャッハ・テストを「原物とかなり隔たりのある画像 (pictures of low fidelity) を用いて遊ぶ知覚ゲーム」であると断言している。彼のように知覚研究を専門とする心理学者から見ると、ロールシャッハ・テストは知覚実験ないし知覚課題であるとは、決していえなかったのである。

Gibson (1982) の知覚論は、入力情報を処理することによって認識が成立するという、Exner の包括システムが依拠するようないわゆる情報処理の理論ではない。知覚は情報の抽出に基づいて直接的に成立するのだという (感覚が呼び覚まされることによるのではない) 直接知覚論、あるいは「情報抽出 (information pickup)」の理論である。彼のいう生態学的な事物や事象に関する、他者が介在しない「直接的な知覚 (direct percepton)」とは、「物質 (substances)」「面 (surfaces)」「媒質 (medium)」などの水準での知覚のことであるが、「このような知覚は、刺激情報<<stimulus information>> (すなわち不変項<<invariants>>) に立脚しており、刺激情報は、探索や移動を通じて抽出される」のだという。

Gibson (1979) にとってインクプロットとは、「子ども向きのなぐり描きの集まりのようなもの」であり、「何十もの事柄についての情報を含んでいる画像」である。そして、その他の普通の画像と違っているのは、「いろいろな不変項が完全に混ぜ合わされており、そうした不変項のそれぞれが、密接に結びつきあい冗長であるにもかかわらず、互いに相

異なっているという点」である。とすると、上記のような知覚論と合わせて考えると、ロールシャッハ・テストは、インクプロットに含まれている不変項ないし刺激情報を抽出する知覚ゲームだということになるのかもしれない。しかし、彼はこのような直接知覚論だけでは、ロールシャッハ・テストを理解することができないと考えていた。

彼が直接的にロールシャッハ・テストについて論じたのは、1956年の論文（Gibson, 1956）だけである。その中で当時のさまざまな考え方、つまりロールシャッハ・テストをいわゆる「知覚」のテストと考えたり、「想像力」や「空想力」のテストと考えたり、「知覚錯誤（misperception）」（光学的誤情報の抽出とか情報の抽出失敗）を誘発するテストと考えたり、インクプロットの非構造的な刺激の体制化を課すテストと考えたり、あるいは個人の私的世界ないし主観的現実が「見る」プロセスに投影されてその対象が報告されるのだと考えたりする諸理論が批判されている。そして、みずからは「ロールシャッハ反応過程を解明するための打開策は、インクプロットが画像として反応されるものであることを前提にすることである。となれば、ロールシャッハへの反応は特殊な画像知覚なのであって、この種の知覚はそういうものとして研究することができるのである」と述べ、ロールシャッハ・テストを発展させるためには、「明示的で検証可能な視覚理論」すなわち「画像知覚にかかわる特別な理論」が必要であることを訴えた。

ところが、彼はこの論文でロールシャッハ・テストの画像知覚に関する理論を展開したわけではない。「プロットイングと呼ばれる一風変わった手続きでインクが塗られた紙から反射する、そうした光によって生み出される特異な光学的変化項を含めて、刺激を分析しなければならない」という有益な示唆を残したまま、その後は絵画の問題に取り組むよう

になってしまったのである。したがってわれわれは、彼の画像ないし絵画の知覚理論から有益な部分を抽出して、ロールシャッハ・テストに応用しなければならない。画像知覚に関する彼の定義は変遷しているが、結局のところ「画像は、それ自体として面であり、しかも他の何かについての情報を表示しているものである」とか、「われわれは画像の面と画像のなかの面とを区別する」と述べて、「画像知覚の二重性（duality of picture perception）」（Gibson, 1979）を強調するに至った。彼は次のように述べている（Gibson, 1971）。

「その絵に表現されている事物に関する知覚を成立させる情報だけを認識できるし、絵画そのもの（すなわち、材料、画風、様式、構図、面とその処理法）に注意を向けることもできる。一方から他方へ観察態度を変えることも、もちろん可能である。また、絵によっては、絵の中に存在する仮想的対象（virtual object）と、絵そのものという現実的対象（real object）との間で、見え方が行きつ戻りつするものもある。……（改行）……この二重性こそが、表現（representation）の本質ではないだろうか」

このように、絵画とは、描き手によって捉えられた光学的情報、すなわち知覚を成立させる情報の呈示である。その際に問題となるのは、間接的な「把握（apprehension）」あるいは「絵画によって媒介された知覚（pictorially mediated perception）」である。これらのことをロールシャッハ・テストに置き換えていえば、たとえば第Ⅰ図版のインクプロットにコウモリを見る場合それは仮想的対象であり、その面にインクプロットの描かれた図版は現実的対象である。そして、その際の絵画によって媒介された知覚には、把握されたコウモリを特定する情報と、面としての（インクプロットの描かれた）図版そのものを特

定する情報が同時に抽出されるという、二重の意識性が伴われることになる。

次に、知覚ではなく表象に関する彼の意見について触れておく。Gibson (1982) はあくまで「絵画は情報の源である」として、絵画ないし画像を表象として理解することを拒んだ。それは「絵画は、それが描写している事物に類似してはいない。したがって、表象 (representation) という語は、絵画を指して用いるべきではない。さらにイメージという語は、途方もなく曖昧である」という一文に顕著に認められる。また、他の箇所 (Gibson, 1980) では「表象 (representation) とはいったい何なのだろう。かつて自分の視覚に現前 (present) していたものを、文字通りに観察者の眼前に再-現前化 (re-present) するのであろうか。とんでもない。……『表象』という言葉は、光学的刺激に関するまったく誤った仮定を物語るものである」と述べ、ここでは表象という概念それ自体に対して疑問を呈している。

このように、彼の理論は、感覚与件論を否定する直接知覚論である。表象世界を否定する姿勢には疑問を呈するものもいるのかもしれないが、ロールシャッハ・テストが光学的なレベルから論じられるべきであることを示唆しており、一考に値するのである。

最後に、Leichtman である。もちろん彼 (Leichtman, 1996) は、Weiner (1998) が批判するように、知覚過程と連想過程を混同して双方を不明瞭にしたわけでも、ロールシャッハ反応を単なる印象とみなしたわけでもない。彼の独創性は、「認知としての知覚 (perception as recognition)」と「解釈としての知覚 (perception as interpretation)」を区別し、インクプロットが「画像 (picture)」であることをはっきりと打ち出しながら、ロールシャッハ・テストにおける知覚と表象の絡み合いを発達の視点から追跡した“representation”に関する理論 (シンボリック表示論ない

し表象理論) であるというところに見出すことができるであろう。基本的に彼の理論は、「話し手 (addressor)」と「聞き手 (addressee)」、「指示対象 (referent)」と「シンボル体 (symbolic vehicle)」という四つの構成要素からなる、Werner, H., and Kaplan, B. (1984) の「シンボル状況 (symbol situation)」に関する考えを応用したものである。「画像表現 (pictorial representation)」という視点からロールシャッハ反応と描画の接点を見出し、ロールシャッハ・テストを超えた一般理論への通路を開拓したことも画期的である。

Leichtman (1996) は、ロールシャッハ反応過程について、「たとえパーセプトの適合性やコミュニケーションの適切性に関わる意思決定によって補完されるにせよ、ロールシャッハ反応は、知覚や連想のプロセスというだけでは、あるいは両者の相互作用というだけでは、十分に説明することができない」と述べている。そして、そこには知覚と連想を合体して両者を一変させる「何か」が絡み合っているとして、対象なり概念を表示するために刺激を利用しようとする「意図 (intention)」つまりインクプロットを他の何かとして見ようとする意図の重要性を説いている。知覚と連想のプロセスは、意図という「上位システム」のもとでその構成要素として統合され、それによっておのれの機能と様式が決定されることになる。Leichtman にとって「インクプロットは媒介であり、被験者が向き合う課題はそれを何かにすること」である。クライアントは、彫刻家が手やノミを用いて大理石で彫像を作るように、「道具としての眼差しを用いて、それと類似するプロセスに関与する」のである。

このように Leichtman は、感覚与件論とは一線を画する独創的な反応過程論を展開している。彼から学ぶべきは、場の理論や、反応形成過程における意図の重要性であろうか。

もちろん、認知と解釈を区別する考え方には、感覚与件論的な知覚の二段階仮説の臭いを嗅ぎ取ることができるし、通常の物の知覚と画像知覚を峻別する姿勢には、一定の留保が必要であろう。

さて、Rorschach から Exner に至るロールシャッハ・テストの反応過程論は、「純粋な感覚与件」+「解釈・判断・記憶・連想・その他」という知覚の二段階仮説であり、哲学的には感覚与件論と呼ばれるものである。はたしてこのような仮説は、インクプロットを目にするクライアントの生きた現実を反映しているのであろうか。大きな疑問である。感覚与件論は、われわれが具体的に生きている日常生活世界とは何の関係もない。われわれの日常において事物の知覚は、個々バラバラな感覚要素を何らかのかたちで加工しなければ成立しないというわけではないし、まず見て次に考える継起的操作によって成立しているわけでもない。このような理論は、ロールシャッハ状況にあるクライアントの現実と、あまりにもかけ離れているのではあるまいか。

もしも感覚与件論が真実であるとすれば、ロールシャッハ状況についていったものではないが、次のようなこっけいな事態が生起するはずである (Ryle, G., 1949)。

「この囚人がどれほど多くの光のゆらめきを見たり物音を聞いたりするとしても、不幸にも彼はフットボールの試合そのものを見たり聞いたりすることはできない……しかし、事実はそれとは逆に、われわれが観察するのは……試合なのであって、われわれのけっして観察することのできないものが感覚なのである」

われわれは、クライアントの生きた現実を反映していない、このような感覚与件論を脱した反応過程論を展開する必要がある。それは、感覚与件論とはまったく正反対の反応過

程論である。たとえば、Leichtman が引用している Werner のシンボル状況論が、われわれの進むべき方向を示唆しているように思われる。Werner and Kaplan (1984) は、「この理論は、知覚物の純粹感覺的（たとえば視覚的、あるいは触覚的）性質といった原子論的な考え方を排し」たもので、「指示対象の形成は感情的要素・内受容的要素・姿勢的要素・心像的要素等によって構成された原初的母体 (matrix) から始まる。そしてこの母体が、シマ化活動によって導かれ水路づけられて十分な知覚的分節を得るに至るのである」と述べている。

このように、われわれが目指すべき方向は、感覚与件から出発するのではなく、ロールシャッハ状況という全体的な「場」から出発するような、原子論的な考えとは一線を画する反応過程論に依拠することである。そうすることによって、クライアントのみならず、臨床家のふるまいも含めた、全体的状況の中からひとつの反応が分節化するプロセスが、見て取れることになろう。また、知覚と思考をあらかじめ峻別する知覚の二段階仮説を脱却しようとするならば、その意味でも、知覚と思考が統一された場の理論に依拠する必要がある。そのためには、従来のモデルを一新するような、新たなロールシャッハ状況論を構築する必要があるだろう。

クライアントの側の反応過程論は、臨床家の側の解釈過程論と不可分である。その意味で、従来の感覚与件論に依拠するということは、構造一覧表が完成した段階ではじめて解釈を始めるということ、つまりすでに出来上がってしまったもの、あるいはたんなる結果から解釈を始めるということである。言い換えれば、それは、構造一覧表を構成する数値化された諸変数という部分から、レポートに描かれる人物像の全体へと、「豊饒化」というかたちで歩を進めることである。

一方、ロールシャッハ状況という全体から、

クライアントがそのつど機能する部分へと、「分節化」というかたちで歩を進める反応過程論に依拠するかぎり、われわれの解釈は具体的なロールシャッハ状況からすでに始まるということになろう。これは、インクプロットを臨床面接の媒介として利用する手法に他ならない。

このような解釈過程の起始点に関わる問題については、次に検討を加える。

IV. 解釈はいつ始まるのか

まず、力強い Phillips, L.(1992) の言葉からはじめよう。引用は Aronow, E., Reznikoff M., and Moreland, K.L.(1995) からである。

「Exner や、ロールシャッハについて叙述するたいていの著者は、出発点としてスコアリング・サマリーから解釈を始めることを好むようである。私は違う。パーソナリティというのは、ロールシャッハ・プロットに対して反応するクライアントの、そのつどの行動の顕現のうちに直接的に現われ、直接的に観察される最たるものであると思っている」

Phillips が批判する包括システム (Exner, J.E., 1991) は、クライアントの言語が記された「プロトコル」、それがコード化された「スコアの継列表」、各カテゴリーの頻度や百分率が記された「構造一覧表」を利用して解釈される。基本的な解釈仮説はあくまで「客観的データ」としての構造一覧表から導き出され、プロトコルやスコアの継列表は、その仮説を点検したり、あるいは新たな仮説を発展させたりするための従属的な位置づけが与えられているだけである。

Weiner (1994) がいうように、確かに包括システムは、いまや「注意、知覚、論理的分析といった諸過程を伴う認知構造」を評価する実証的なアプローチであることを超えて、

「投影や象徴化といった諸過程を伴う主題的イメージ」をも含めて、「パーソナリティの機能を描写するデータを収集する技法」として理解される。彼は「全体として捉えると、ロールシャッハはテストではなく技法である」として、ロールシャッハ・テストを RIM (Rorschach Inkblot Method) と呼ぶことを提案しているほどである。だが、やはり包括システムにおいては、主題的イメージなどに関わる分析は量的分析の後で、なおかつ量的分析の枠組の中で行われるわけであるから、前者はあくまで「二の次 (back seat)」(Aronow, Reznikoff and Moreland, 1995) にすぎないのである。

解釈は、つまりクライアントに関わる臨床家の理解は、いつ始まるのであろうか。Phillips はロールシャッハ状況からそれを始める。包括システムに依拠する臨床家は事後的解釈場面で、さらにいえば反応のコード化と集計を経た構造一覧表が完成してから始める。この違い、つまり関与的観察者として反応が形成されるプロセスからすでに解釈を始めることと、クライアントに影響を及ぼさない客観的観察者として主観によって汚染されていないデータを収集し、すでに出来上がってしまったもの (構造一覧表) を出発点としてそこから解釈を始めること、という違いを生むのは、やはり両者が依拠する方法論であろう。結論からいえば、臨床家の「知覚の材料は、事後になってはじめて何らかの概念的形式に铸造されるのではない」(Cassirer, E., 1910) ののだが、それに反して、包括システムには観察と理論を分断する論理実証主義的な帰納法に対する信奉がある。

このような違いは、事後的解釈場面が重視される量的分析ないしカウンティング・メソッドと、インクプロットを臨床面接の媒介として使用しながらロールシャッハ状況における解釈を重視する手法とのあいだに認められるものである。ロールシャッハ解釈を超えた臨

床心理学研究法にまで範囲を広げると、前者は量的研究法として、後者は質的研究法としてそれぞれ理解されるのかもしれない。しかし、質的研究法のなかにも上記の帰納法的な特徴を色濃く残している手法があり、質と量の二分法的思考によっては、ロールシャッハ状況ないし臨床場面そのものをあくまでデータ収集の場とみなして空洞化してしまう危険性を忘却してしまうはずである。

たとえば、現象学的な立場にある Giorgi, A. (1997) は、具体的個別の認識から自由変更を経て普遍的な本質の把握に至る Edmund Husserl の形相的還元の手順を応用して、質的研究の手順を、(1)言語的データの収集、(2)データの読み込み、(3)諸部分へのデータの分割、(4)一定の視点からのデータの組織化と表現、(5)研究者共同体への伝達を目的としたデータの総合ないし要約、という五段階に区分している。彼の手法においても、解釈（現象学的還元の手続き）が始まるのはあくまで(1)言語的データの収集後であり、やはり具体的な対人関与の場面はデータ収集の場としての位置づけを与えられているにすぎないのである。このことは、同じく現象学的分析を標榜する Churchill, S.D. (2006) においても、同様である。

ロールシャッハ状況が、事後的に解釈するためのデータをたんに収集する場へと墮することは回避できないのであろうか。豊穡であるはずの臨床場面が空洞化してしまうことを、われわれは回避することができるのであろうか。

空洞化しつつある臨床場面の復権を狙って、ロールシャッハ状況に遡及して検討を加える。まず、着席する位置に関してである。論理実証主義的な包括システムに依拠する臨床家は、「意図的でないにせよ非言語的な手がかりが、誤った構えを作り出してしまう」ことを回避するために、「対面する配置は決してとらない」(Exner, 2001) ことになっている。

Beck, S.J. (1944) によると、Herman Rorschach の原法は、対面か、クライアントの背後に座るものである。また、Klopfer, B. and Kelly, D.M. (1942) は、何よりもまず雰囲気を大切にした上で、クライアントが求めるのであれば横に並んで着席するが、臨床家自身にも図版が見えるように、それからクライアントの邪魔にならないように、若干その背後に着席することを求めている。

いずれのシステムも、一見するとクライアントが反応しやすいように配慮する目的があつて、あるいは古典的精神分析療法を範例として、そのために着座位置を指定しているかのようである。しかし、包括システムが臨床家の着座位置を指定するのは、別の意図があるからである。つまりそこには、反応に及ぼす臨床家の影響を極力排除して、事後的にコード化するための客観的データを収集しようとする意図があるのだ。包括システムが危惧しているのは、臨床家の影響によって諸変数が変化してしまうことなのである。

包括システムには、他のシステムには見られない特異な施行手続きがある。それは、13個以下の反応数の場合に、最初から実施しなおすことである。変数としての反応数Rは、「構造的データを規範的に（つまり法則定立的に）使用する際のアキレス腱のようなもの」(Mayer, G.I., 1992) であり、包括システムのみならず、すべてのロールシャッハ・システムにおいて、その諸変数に少なからず影響を及ぼすのである。

このように、包括システムは、ロールシャッハ状況を経験的な自然科学における観察と実験の手法に近づけるために、臨床家とクライアントとの相互作用を極力回避すると同時に、テストとしてのアキレス腱（つまりR）を死守しようとする標準化された心理測定法的な施行法に依拠している。ロールシャッハ状況は、事後的に解釈すべきデータを収集する目的のためにあるのだ。そこに予め立てられた

概念（展望するための何らかの視点）が何もないとすれば、それは純粋な観察あるいは「いかなる概念的前提をも混入しないと考えられる『純粋の』経験」（Cassirer, 1910）であり、収集されたデータは、臨床家の主観によって汚染されていない（バラバラの）観察のたんなる帰納的総和ということになる。包括システムに依拠する臨床家が構造一覧表から解釈を始めるということは、実は「生の事実が数学的シンボルによって表わされ、それと取り替えられてはじめて、その事実を現象全体と体系的に統合する概念的把握（das Begreifen）という知的作業が始まる」（Cassirer, 1910）、そうしたFrancis Bacon的な帰納主義を意味しているのである。これは、時々刻々と変化する瞬間に身をおく能力、あるいは個々の個性をそのまま捉える能力を減退させる、臨床場面の空洞化ではあるまいか。しかしながら、このようにして観察と理論を分断し、双方の解釈学的循環を無視することは、すでに述べたように、Hanson (1958)の「理論負荷性（theory-ladenness）」テーゼによって否定されるのはいうまでもない。

その一方で、上記の自然科学的な観察とは異なる精神分析的アプローチによって、ロールシャッハ・テストを施行する臨床家も存在している。実験的にではなく、あくまで臨床的に施行するのである。たとえば、Smith (2005)は「パーソナリティ・アセスメント」というのは、客観的データを収集してそれを分析することではない。それは人間的な出会いであり、あらゆる人間的な出会いがそうであるように不確定性を伴っている。もちろん、そこに関与する両者に対して、それが変化と成長をもたらす可能性にも満ち溢れているのである」と述べている。彼にとっては、心理療法のみならず、ロールシャッハ状況も出会いに他ならないのである。

このように、出会いを強調する臨床的な手法と、包括システムの施行法は対照的である。

しかしながら、自然科学の観察法が対象にまったく影響を及ぼさない静的観察で、臨床的な手法が対象と相互作用する動的実践であると、単純に規定することはできないのではあるまいか。というのは、自然科学における純粋無垢の観察に（無いものとして捨象されている観察者の）主観／主体を導入した場合には、両者のあいだにそのような差異を指摘して強調することが困難になってしまうからである。Weizsäcker, V. v. (1988)は、以下のように述べている。

「実験し、配置し、動かし、行為することによって対象が特定の存在になるまで調整し、対象を攪乱したり刺激したり興奮させたりすることによって客体／客観を生み出す—これが経験的および理論的な自然科学における観察／観測と実験の手法である。すべての規範的なものの中にも、同時に攻撃的な契機が含まれているのだし、[真理の]アプリオリによる後見と、あらゆる法則による命令が、極めて容易に力づくという性格をおびることになるこの強引さを、われわれの目から覆い隠してしまう」

言うまでもないが、これはあくまで自然科学における実験場面について描写したものである。純粋無垢の観察者などひとつの虚構にすぎないことが、あるいはかくあるべしという理想にすぎないことが理解されるであろう。したがって、私は、Smith (2005)とともに次のように述べることができる。すなわち「私は決して、この施行の様式（標準化された施行の様式のこと—田澤注）を変更したアセスメントへのアプローチを是認するわけではないし、中立的で客観的な試みの放棄を勧めているわけでもない。というよりもむしろ、どんな出会いであれ、それは人の心に影響を及ぼすこと、それから他者に関するわれわれの理解が、われわれに与えるその人のインパ

クトの所産であること、これらを念頭に置いておくことが極めて重要である」ということである。

中立的にロールシャッハ・テストを施行し、客観的なデータが収集されれば、たしかに当初の目的は達成されるであろう。だが、そこには落とし穴がある。帰納法が目的とするのは理論の生成、つまり事実を（記号であれ、図式であれ、文章による命題であれ）何らかのシンボルに変換することであるから、臨床家は感性的直観の具体的現実からますます遠ざけられてしまうのである。したがって、臨床家が構造一覧表において到達するのは、「われわれを感覚の真の現実性からますます疎遠にする新しい<命名 (Namengebung)>にすぎない」(Cassirer, 1910) ことになろう。

では、精神分析的アプローチをとる Lerner, P. M. (1996) はどのように解釈するのであろうか。彼のアプローチは、Schachtel, E. (1966) の体験的アプローチ、Mayman, M. (1964) の臨床的-直観的アプローチ、Kohut, H. (1978) の共感的な現象学的アプローチを取り入れた臨床的なもので、推論の流れとしての解釈過程は、(1)テストを施行してプロトコルをコード化し、それを一覧表にまとめる「データ収集 (data gathering)」の段階→(2)一覧表に整理されたスコアを確認する「量的分析 (quantitative analysis)」の段階→(3)質的なプロトコルのデータと個々のコードを関連づけながら一連の推論を導き出し、実質的な解釈が開始される「一次推論 (first-order inferences)」の段階→(4)レポート作成に向けて、各々の推論の分類と結合をワーク・シートに記入しながら行う「変換 (transformation)」の段階→(5)最終的な「レポート作成 (report writing)」の段階に大別される。

彼のように事後的な「一次推論の段階」において共感や直観を重視して、量的分析よりもプロトコルの質的解釈を優先すれば、具体

的現実から疎遠になることは回避されるであろうか。このようなアプローチ、つまりロールシャッハ状況においてではなく事後的に解釈を始め、レポートの作成を終結とするような直線的アプローチを総称して、本論では「直線モデル」と命名する。このようなアプローチでは、プロトコル解釈を重視しようが、構造一覧表による解釈を重視しようが、次のような結論に至るだけである。つまり「われわれが所与の直観にたいして行なうすべての論理的作業はただ単にわれわれをその直観からしだいしだいに遠ざけることにしか役立たないという、奇妙な結論が出てくる。所与の直観の内実とその構造をより深く捉えるのではなく、われわれはもっぱら個々の事例に固有の特徴がすべて見失われた浅薄な図式に達するにすぎないということになる」(Cassirer, 1910) ということである。

このような問題を解決するためには、臨床家の解釈過程としての認識の最終段階に、直観を置くことである。というのは、「直観は特殊を普遍にただ包摂するだけでなく、両者をただひとつのまなざしのもとにまとめあげるからであり、そしてそれによって、すべての存在の諸原理を抽象的な考察のもとに隔離するのではなく、諸原理をそれらが直接機能している現場において捉え、このようにして事象のあくまで特定の一にかぎりの秩序を見渡すから」(Cassirer, 1907) である。直線モデルのように、構造一覧表に始まりレポート作成に終わる解釈過程論では、観察と理論は分断されたままである。観察と理論を分断しないのであれば、解釈はすでにロールシャッハ状況から始まるはずである。だが、そこから解釈を始めたとしても、構造一覧表を経てレポート作成に終わるのであれば、結局はそれも直線モデルと変わらないことになる。そこで、レポート作成の後に臨床場面に帰還して、レポートに記された命題が直接機能しているであろう現場で、それを直観的に捉える

というわけである。テスト結果のフィードバック面接がこれにあたるであろう。

ロールシャッハ状況、事後的解釈場面、それからフィードバック面接という三つの諸段階がここに出揃った。しかし、これらをただつなぐだけでは、たんに接木するようなものである。これらのプロセスを、節目によって分節化したひとつの全体として統合するには、上記の直線モデルに代わる新たな原理が必要である。(以下、後半に続く)

[Abstract]

Raising Questions about the Current Rorschach Methodology (Part 1 of 2)

Yasuhiro TAZAWA

This article examines methodological issues in the current Rorschach test to suggest a new direction for the future. The examination is made mainly from the following three perspectives: (1) response process, (2) interpretative process, and (3) differences between quantitative and qualitative analyses. The examination shows that the current Rorschach test is totally influenced by logical positivism. The response process of the Rorschach test — even if the system is claimed to be phenomenological — has been theorized by presupposing sense-datum theory as an element. From now on, we would need overall response process theory or comprehensive field theory that approaches the lived experiences of perceivers. The interpretative process of the Rorschach test has been dominated by one-sided interpreter-centered information gathering models that are grounded in natural scientific experiments and observations. From now on, we would need therapeutic models based on humanistic interaction. The current Rorschach test unconcernedly mixes nomothetic and idiographic methodologies. However, these completely different paradigms are incommensurable. That is, it is difficult to integrate them or to use them together, keeping them equidistant. We should be aware that results from quantitative and qualitative analyses cannot be easily unified.

To be continued in Part 2.

